

国 語

記 述 式

参 考 問 題 例

次の【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】は、なつめさんが「記憶」について探究レポートを書くときに参考にしたものである。これらを読んで、後の問い(問1～3)に答えよ。

【文章Ⅰ】

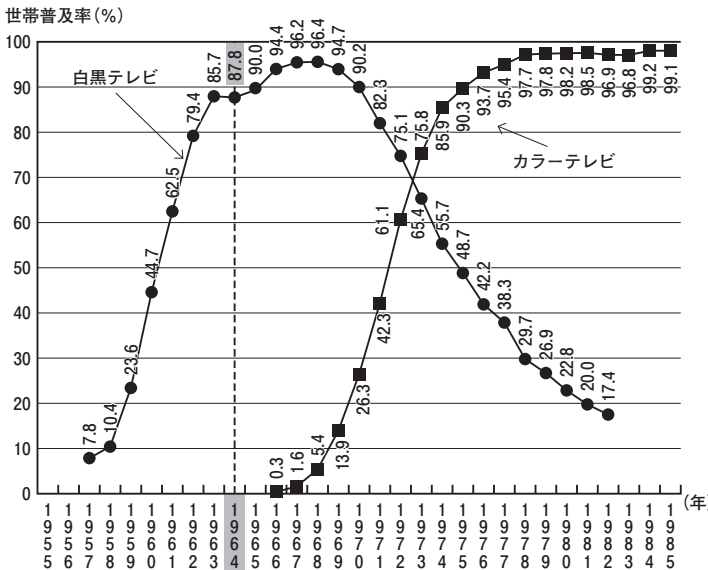
メディアの歴史の中で一九六四年の東京オリンピックが語られるとき、決まって出てくるのは、

A

カラーテレビによる中継放送がこのオリンピック

をもって始まったという言説である。たしかに、当時まだ小学生だったとはいえ、このオリンピックを曲がりなりにも同時代者として体験した私のような者にしてみれば、開会式の入場行進の一番最後に、真っ赤なブレザーを身に着けた日本選手団が入場してくるのを目にした時の鮮烈な印象は今でも忘れることができないほどである。そのさらに四年前のローマ・オリンピックの時には、少しでもデータ量を減らすために大幅にコマ落としされ、ほとんど何をやっているかも判別できないような「電送写真」(もちろん白黒である)で見るほかなかったことを考え合わせるならば、この映像技術の進歩は驚くべきことである。放送衛星による世界同時中継が行われた初のオリンピックであるという点でも、この一九六四年の東京オリンピックが、映像技術の歴史において新たな時代の画期となる大会であったことはたしかである。

しかし、ここでよく考えてみよう。いったいどれほどの人が自宅のカラーテレビでこの開会式の映像を見たのだろうか。少なくとも私の家には



消費動向調査による白黒テレビとカラーテレビの普及率の推移
(平成二六年版「情報通信白書」による)

カラーテレビはまだなかった。実を言うと、私の家でオリンピックがカラーで見られるようになったのは、何とその八年後、一九七二年のミュンヘン・オリンピックをまつてのことであった。もちろんこれだけなら、単に私の家が貧乏だったというだけの話かもしれないのだが、内閣府の消費動向調査の結果を調べてみると(注1)（総務省編 2014）、カラーテレビの普及率のデータがはじめてカウントされるようになるのは一九六六年のことで、何と〇・三パーセントにすぎない。この時点での白黒テレビの普及率は九四・四パーセントで、a するのは一九七三年のことであるから、どうやら私の家だけが貧乏であったというわけではなさそうである。

(わたなべひろし)
渡辺裕『感性文化論 〈終わり〉と〈はじまり〉の戦後昭和史』による。

なお、一部表記を改めたところがある。

(注) 1 (総務省編 2014)——二〇一四年に総務省から発表された「ICTがもたらす世界規模でのパラダイムシフト(情報通信白書 平成二六年版)」を指す。

【文章II】

物語るためには過去の出来事を記憶していなければならないし、さらに重要な点は、それらの出来事の順序関係を理解していなければならないことである。そのことは否定されないにしても、記憶とは過去の出来事の客観的な記録なのだろうか。心理学などのさまざまな研究の蓄積の中で、われわれが関心を示す記憶研究の一つの知見は、記憶がその文脈に依存するという事態である。例えば、ある文章を示し、それがどの程度記憶されるかを検証する実験において、一方では、その文章の内容を的確に表す絵を前もって示すのに対して、一方では、そのような措置をとらないとき、明らかに前者のケースの方が文章のより多くの内容を思い出すことができたことが報告されている。このことは、すなわち「文脈が想起される内容を決める」ことを意味している(注1)（榎本 1999）。物語論との関連で言えば、記憶(想起)は物語に依存している。成功の物語のもとで過去の出来事を想起する

ときと、失敗や挫折の物語のもとで想起するときとは、異なった意味づけが与えられることは容易に想像されるだろう。

「物語としての自己」を論ずるM・フリーマン^(注2)は、過去は、あくまで記憶の中で現在においてあり、現在の観点から構築されたものであること、またその際に、過去の出来事は現在の経験に符合するように解釈され、一つのストーリーの部分となるように紡ぎ合わされることを指摘する(Freeman 1992)。^(注3)つまり、記憶は、過去の出来事の客観的な記録ではなく、現在における特定の観点から一つのストーリーに見合うようにして想起する営みである。このような記憶の視点に立つとき、物語と記憶は不可分で循環的な関係にある。つまり、物語は過去の出来事の記憶がなければ成立しないし、一方で、記憶は物語に依存して初めて成立するのである。

(片桐雅隆『過去と記憶の社会学——自己論からの展開』による。
かたぎりまさたか)

なお、一部表記を改めたところがある。

(注) 1 (榎本 1999)——一九九九年に榎本博明が出版した『〈私〉の心理学的探求』という著書を指す。

2 M・フリーマン——マーク・フリーマン(一九五五)。アメリカ生まれの心理学者。

3 (Freeman 1992)——一九九二年にフリーマンが発表した“The Self as Narrative”という論文を指す。

問2 なつめさんは、【文章Ⅰ】の傍線部A「カラーテレビによる中継放送がこのオリンピックをもつて始まった」という言説」に関する筆者自身の体験が、【文章Ⅱ】で示されている「出来事」と「記憶」との関係についての具体例に該当するのではないかと考えた。なつめさんが具体例と考えた【文章Ⅰ】の筆者自身の体験とはどのようなものか。五十字以内で書け（句読点を含む）。

ただし、「白黒」「カラー」の二語を用いて書くこと。

問3

なつめさんは、国語の授業で私小説について学習した。興味をもったなつめさんのグループは、私小説と呼ばれるいくつかの作品を読み比べて、私小説の【定義】を次のようにまとめてみた。さらに、なつめさんは、【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を踏まえ、検討してみたところ、その【定義】の一部に疑問をもった。なつめさんの考えを後の(1)～(3)を満たすように書け。

【定義】 「私小説とは、作者自身の生活体験を素材としながら、その生活や経験したことを虚構を排して描き、作者の心境や感慨を吐露していく小説のこと。」

- (1) 二つの文に分けて、全体を八十字以上、百二十字以内で書くこと(句読点や括弧を含む)。
- (2) 一文目は、【定義】の中で疑問をもった部分が分かるように書くこと。
- (3) 二文目は、【文章Ⅰ】または【文章Ⅱ】の内容を根拠として挙げて、疑問をもった理由について書くこと。

